皮膚科医必携

爪白癬・爪真菌症診療最前線

五十棲 健（東京警察病院皮膚科部長）

本コンテンツはハイブリッド版です。PDFだけでなくスマホ等でも読みやすいHTML版も併せてご利用いただけます。

▶HTML版のご利用に当たっては、PDFデータダウンロード後に弊社よりメールにてお知らせするシリアルナンバーが必要です。

▶シリアルナンバー付きのメールはご購入から３営業日以内にお送り致します。

▶弊社サイトでの無料会員登録後、シリアルナンバーを入力することでHTML版をご利用いただけます。登録手続きの詳細は https://www.jmedj.co.jp/page/resistration01/ をご参照ください。

▶登録手続

緒言 ―― p2

1 爪白癬・爪真菌症治療はきわめてプロフェッショナルな医療行為である ―― p2

2 爪白癬（爪真菌症）の最新治療戦略 ―― p2

1) 木を見て森を見ず ―― p4

2) 診断は確かか？　病変の範囲は確認したか？ ―― p4

3) 疾患や起因菌のことを理解できているか？ ―― p7

4) 治療薬や治療の特性を理解できているか？ ―― p8

5) 合併症はないか？ ―― p12

6) 併用薬はないか？ 妊娠の可能性は？ ―― p13

7) 最初が肝腎 ―― p13

8) 医師が先にあきらめていないか？　あるいは根治可能なのにあきらめさせていないか？ ―― p14

9) 目標は根治か？ 拡大防止か？ ―― p15

10) 根治可能な症例をどう見極め，治療を提案するか？ ―― p15

11) 患者希望と実情を考慮した最善の治療法を提案できているか？ ―― p15

12) 治療方針や継続の必要性を理解し，正しく伝授できているか？ ―― p17

13) それでも難治な場合にどうすればよいのか？ ―― p18

おわりに ―― p20

▶販売サイトはこちら

日本医事新報社では、Webオリジナルコンテンツを制作・販売しています。

▶Webコンテンツ一覧

© 日本医事新報社 2024　著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。

緒言

爪白癬は爪の真菌感染症であるが，高い確率で合併する足白癬に対する治療も必須である。欧米では爪真菌症（onychomycosis）と称することが一般的であり，割合は低いが起因菌が皮膚糸状菌でない場合も包含している。いずれも感染症であるため，可能であれば根治を志向するが，根治できない場合も家族，施設内，あるいは疾患の拡大，重症化，不快な症状を取り除く等の対策が必要である。診断の確認が必要であることは言うまでもないが，重症度，年齢，妊娠の可能性，合併症，併用薬，患者希望，通院継続の可否等を考慮して，合理的かつ継続可能な治療法の選択と患者指導を志向するのがよい。

1 爪白癬・爪真菌症治療はきわめてプロフェッショナルな医療行為である

爪白癬・爪真菌症治療は，治療に理解と熱意のある医師にのみ推奨されるプロフェッショナルな医療行為である。血液検査，画像検査では診断不能であり，臨床的に看破して鏡検で確定診断する必要があるため，適切な診断治療が可能な医師が診療するのがふさわしいと考えられる。

したがって，自分はふさわしくないと考える医師は，可能な状況であれば，適していると思われる医師への患者紹介も検討すべきであろう。あるいは，自分はふさわしくないと考えるが，やむをえず当該患者を診断治療する立場となりうる皮膚科専攻医・専門医等の医師は，以下の記述を参考にして，ふさわしくなって頂くことを強く推奨したい。

2 爪白癬（爪真菌症）の最新治療戦略

爪白癬および爪真菌症は，治療せずに放っておけば親子代々伝播していく感染症であるから，可能な限り根治させたい疾患である。爪がほかの臓

© 日本医事新報社 2024 著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。

器と異なる点は，免疫や炎症も届かず，爪自体にも体細胞でみられるような代謝や免疫反応もなく，緩徐な爪の伸長による置き換わりがあるのみであり，血液検査による診断は不可能，ということである。さらには手指爪で6カ月以上，足趾爪では10カ月以上経過しないと生え変わらないため，いずれの治療法によっても，根治には長期の月日がかかるということになる。

しかしながら，しっかりとした治療戦略をもってすれば，根治を志向することが可能な疾患でもある。逆に言えば，戦略を間違えれば患者をあきらめさせるだけの結果になり，白癬という親から子へ引き継がせてしまう負の連鎖を断つことが，とうていおぼつかないことになるので注意が必要である。

以下，簡略に治療戦略として考慮すべき項目を列記し，詳細は後述させて頂く。

項目：

1) 木を見て森を見ず
2) 診断は確かか？ 病変の範囲は確認したか？
3) 疾患や起因菌のことを理解できているか？
4) 治療薬や治療の特性を理解できているか？
5) 合併症はないか？
6) 併用薬はないか？ 妊娠の可能性は？
7) 最初が肝腎
8) 医師が先にあきらめていないか？ あるいは根治可能なのにあきらめさせていないか？
9) 目標は根治か？ 拡大防止か？
10) 根治可能な症例をどう見極め，治療を提案するか？
11) 患者希望と実情を考慮した最善の治療法を提案できているか？
12) 治療方針や継続の必要性を理解し，正しく伝授できているか？
13) それでも難治な場合にどうすればよいのか？

© 日本医事新報社 2024 著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。

1) 木を見て森を見ず

爪白癬はもともと足白癬が拡大，重症化していくことで発症するため，症例の大部分が足白癬を合併しているか，既往で持っていることになる。したがって，爪白癬は足白癬から派生した全身の白癬（皮膚糸状菌症）の最終かつ難治な病変の一部ということでもあり，爪の病変だけを治療すればよいということではない。すなわち，爪白癬だけを治療すればよいと考えているうちは，全身の白癬を長い年月をかけて増悪させてきた白癬罹患患者を根治に導くことは，とうていできないということを認識すべきであろう。

2) 診断は確かか？ 病変の範囲は確認したか？

診断は直接鏡検で菌要素を証明することが必要かつ十分であるが，前述のごとく，同時に足および，ほかの身体部位の病変を観察する必要がある。足白癬を合併しているか，あるいは，市販外用薬等で外観上は改善しているが，足白癬の既往を有しているのが典型的な爪白癬である。

注意深い問診と視診をもってしても足白癬の合併も既往もない場合には，割合は低いものの，時々遭遇する非皮膚糸状菌性爪真菌症（non-dermatophyte onychomycosis）の可能性を検討したい。この場合，可能な状況であれば真菌培養で起因菌を確認したいところであるが，確認できない場合においても，皮膚糸状菌以外にも有効である治療を想定しておくのがよい。

【爪白癬の診断補助】

2022年に補助的検査法としてデルマクイック®爪白癬が利用可能となった。

❶鏡検で陰性であったが爪白癬の可能性が否定できない場合

❷往診や遠隔地等での利用

© 日本医事新報社 2024 著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。

❸鏡検の技能に精通していない場合

等の状況が想定されるが，添付文書では❶，❷での利用に限定されている。

以下，デルマクイック®爪白癬に関する厚生労働省の通達（厚生労働省の「診療報酬の算定方法の一部改正に伴う実施上の留意事項について」）より該当部分を引用する[1)]。

本検査は，以下のいずれかに該当する場合に算定できる。

（イ）KOH直接鏡検が陰性であったものの，臨床所見等から爪白癬が疑われる場合。なお，この場合においては，本検査を実施した医学的な必要性を診療報酬明細書の摘要欄に記載すること。

（ロ）KOH直接鏡検が実施できない場合。なお，この場合においては，KOH直接鏡検を実施できない理由を診療報酬明細書の摘要欄に記載すること。

また，直接鏡検では爪白癬でない場合にも爪の外傷の程度，爪甲下出血の合併，稀ではあるが爪に合併した疥癬等，爪病変自体の観察も可能であるため，直接鏡検が基本的検査法であることに変わりはないので，デルマクイック®爪白癬は補助的診断と位置づけるのがよい。

デルマクイック®爪白癬使用の実例を，**図1**に示す。本検査実施後に残渣でKOH直接鏡検を追加実施できるので，可能な状況であれば鏡検も実施して頂くのがよい。

© 日本医事新報社 2024 著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。